



出会うということ
—曾我量深の清沢満之との出会いから—

大谷大学公開講演会オンライン配信
文学部哲学科 村山保史

はじめに

- 清沢満之には弟子と呼ばれる多くの人たちがいるが、こうした人たちに比べると、曾我の清沢との関係はやや微妙である。
- 曾我は最初、清沢（や弟子）の思想を激しく批判したが、徐々に批判を緩め、晩年には「一日でも忘れることのできない、わが清沢満之先生」（「我如来を信ずるが故に如来在ます也」1965年）というように清沢を強く称賛するようになったからである。

- こうした変化の背景には清沢との出会いがあった。曾我は九十歳を祝う記念講演において生涯を振り返って言っている。「わたくしは、とにかく、清沢満之という方に遇った。清沢満之という方は、わたくしどもの善知識である。」（同上）
- 「出会う」とはどのようなことであろうか。曾我の清沢との出会いを参考にしつつ考えたい。

1. 曾我量深の略歴

- 1895年、真宗大学寮本科に入学する。
- 1899年、真宗大学寮本科卒業、真宗大学研究院へ。
- 1901年1月、浩々洞（清沢、佐々木月樵、暁烏敏、多田鼎等らによる共同体）から『精神界』が刊行される。
→そこで展開された思想は精神主義と呼ばれる。
- 同年10月、真宗大学が東京巢鴨へ移転・開校するにともない、東京に移住する。→学長は清沢満之
- 1902年1月「精神主義」で精神主義を激しく批判する。2月には「再び精神主義を論ず」で再度の批判をするが、やや穏当な調子になる。

- 1902年2月、研究員に在籍中の身であったが、清沢からの抜擢により、佐々木、多田らとともに真宗大学教授（非常勤）になる。
- 同年10月、清沢の真宗大学辞任とともに自身も大学を辞職する。→清沢は三河大浜の西方寺へ。
- 1903年3月、浩々洞の同人となる。
- 同年6月、清沢死去

- 1904年7月、真宗大学研究院を卒業する。
- 1904年9月、真宗大学教授に就任する。
- 1911年、真宗大学が京都に戻り、高倉大学寮と合併して「真宗大谷大学」と改称することが決定すると、大学の京都移転に反対して辞任する。
- 1916年、『精神界』の編集責任者となる（前編集責任者は金子大榮）。
- 1961年～1967年、大谷大学長

2. 「精神主義と性情」

■1901年11月の『精神界』に（清沢に代わって）暁鳥が書いたもの。これが曾我の批判の発端となる。
「要するに吾人の精神主義は、人を殺す者も、国を売る者も、物を盗む者も、徳高き賢者、識博き智者と愚者に安慰を得るの道なり。男女貴賤を論ぜず、知者と愚者を議せず、善人悪人を分かつたず、一味平等の安慰を得て、花咲く春も、鳥鳴く夏も、葉の散る秋も、雪をふる冬も、慈悲あたゝかき如來の光明に満足と快樂とを感ずるは、これ吾人精神主義の大道なりとす。」（「精神主義と性情」）

3. 最初の精神主義批判

「精神主義は恩師清沢先生を初とし、浩々洞一派の諸君の唱道する所、其思想必しも斬新なる者あるに非ず、唯科学万能の時代に現出したるを奇とす。……要するに精神主義は其消極的態度を過去に專注し……罪惡に対するアキラメ主義とする点に於て非常に有効なるも、此を將來の行為の指導者としては、其価値殆ど零なりと云はざるべからず。」（「精神主義」1902年1月）

4. 清沢の返答

「精神主義は過去の事に対するアキラメ主義なり。精神主義は現在の事に対する安住主義なり。精神主義は未来の事に対する奮勵主義なり。……然れば即ち、吾人が精神主義の指導によりて、實地に満足と安住とを得ば、吾人は自然に、彼小兒の如く、活潑々地の行動に勇進し得べきなり。自由の活動とは即ち是なり。精神主義は、未来の事に対しては、実に奮勵の主義たるなり。」（清沢満之「精神主義と三世」1902年2月）

5. 二度目の精神主義批判

「我等が本誌前号に掲げたる、精神主義に関する疑問に対して、精神主義の諸君は「精神主義と三世」……等の題目の下に、丁寧なる説明を加へられたり。多謝々々。されど、我等は不幸にして殆ど何等の得る所なきを悲む。我等の疑問は依然として残れり、如来は我等に心靈的鍛鍊をなさしめんが為に、猶暫らく是疑問を解釈せしめ玉はずと覚ゆ。我等は謹んで疑問を撤回せむ。我等は唯感謝の外なき也。

17

花田衆甫〔凌雲〕君、「精神主義と性情」と云へる「精神界」の論文を批難すること、至れりと云ふべし。……我等は君の熱心なる態度を喜ぶと共に少しく君の一顧を望まざるを得ず。他なし、宗教上の文字は悉く常識を以て解する能はざること是なり。……是故に直に宗教上の第一義諦の発表に向て、偏狭なる道德的批判を加ふべきにあらず。」（「再び精神主義を論ず」1902年2月）

31

- 曾我にとって1902年（明治35年）以降は、清沢に対して、残った疑問を「解釈」するための時間となった。そしてその解釈は、如来が課した「心靈的鍛鍊」なのであった。
- その後、曾我は清沢（1903年死去）をどのように解釈したのだろうか。

18

6. 清沢からの学問的恩恵

(「清沢先生讃仰」1936年より)

①浄土経が仏教の本道であることを教えた。

「此の仏教と云ふものは私共の学生時代、即ち明治時代には、唯単に僧侶だけの学問であつた。其の仏教の中に於ても他力門の仏教、即ち浄土宗とか浄土真宗とか、大無量寿経にお説きになつた所の他力のお御法と云ふやうなものは、全仏教の歴史の上より見れば、是は唯単なる一つの支流であり、亜流であつて、決して仏教の本流ではない。さう云ふ工合に仏教界一般が認めて居つたやうであります。」

13

「〔清沢は『宗教哲学骸骨』を書き〕さうして其の晩年に、精神主義と云ふ一つの方法論に依つて、他力門の仏教と云ふものゝ内面を開顕された。其の清沢先生の教へに依りまして、私は生れて始めて我浄土教と云ふものが全仏教の本流である、と云ふことを料らず知らして戴いた。……若し清沢先生が明治時代に御出世がなかつたならば、恐らくは私共は此の他力の大道と云ふものをば仏教中の浅薄な、下級の教へ、斯う云ふ風に今でも思つて居るに違ひないのであります。」

14

②仏教の実践（他力の大道、信仰）を一般に開いた。

「それは単なる仏教の信徒とか、単なる仏教の坊さんとか云ふ或る特殊な人だけに通用するものでしかなかつた。仏教の実践とはさう云ふ専門的特殊的のものだと思つて居つた。清沢先生は此の仏教の実践と云ふものを広く一般の人物に、それが仏教の信者であらうとあるまいと、それがキリスト教の信者であらうが、世間一般の求道者であらうが、如何なる階級の人をも撰はず、一般大衆と云ふものに向つて……開顕して下されたのである。」

15

③阿含經の重要性を明らかにした。
「まあ日本の坊さんは、何でも大乘仏教でないと駄目だ、斯う云ふ。けれども其の中に、清沢先生は今一般の日本の仏教徒が小乗仏教だと言つて相手にしない、見返りもしない所の阿含經と云ふものを、早くも明治の中頃に独り静かに拜読して居られた。
今日は何でも阿含經と云ふものは根本仏教である、と云つて今更の如く威張つて居るけれども、本当に阿含經と云ふものゝ尊いものであると云ふことを初めて明らかにした人は清沢先生、是が先祖である。」

7. 清沢からの人格的恩恵

(「自己を弁護せざる人」1909年より)

①「自己を弁護せざる人」
「想へば今を去る八年の前の二月、上野精養軒に於て京浜信徒の会があつた。当時先生の主義に関して論難甚だ盛であつた。先生即ち一場の食卓演説をなされた。要は「我々が精神主義を唱へて、諸方の高教誠に感謝の至に堪へぬことであるけれども、我々は何等をも主張するのでなく、唯自己の罪惡と無能とを懺悔して、如來の御前にひれふすばかりである、要は慚愧の表白に外ならぬ」との御語であつた。その森嚴なる御面容

髣髴として忘るゝことが出来ぬ。先生の如き論理的なる頭腦を以てせば如何なる巧妙の弁護も出来たであらう、一言の弁護すらなされぬ所、此正に深く自ら慚愧に堪へざると共に大に恃む所あるが為である。我は已に如來に依りて弁護せられ終りたではない乎。此れ恐くは先生の確信である。私は先生に付て第一に想ひ出すは彼の一事である。私は即ち「自己を弁護せざる人」として先生を忘るゝことが出来ぬのである。」

■曾我は「徹底的な懺悔」が「五体を地に投げ」ることであるとする。しかし人間は、自分には値打ちがある、取り柄があると思っていることからなかなか心からの懺悔ができない。

■曾我には、清沢がいくらでも弁護できたのに弁護しなかったのは、かえって清沢が徹底的な懺悔ができていた（まったく如来によっている）ことの証拠であると思えた。

39

②「疑問の人」「未解決の人」

「わが先生は一言すれば心機転々の人である。常に自己を弁護する必要のある人である。第一に士族の家に生れて僧門に入りしは云何、棄徳の生活に入りしは何故なりや、一派革新を絶叫しつゝ、自ら建設の地位に当らざりしは何ぞや、その堅忍の意志を以てして猶精神主義を唱道せられたるは何ぞや、是等一一に弁護を要するではない乎。誠に先生の一生は矛盾の一生であり、疑問の一生であり、大に弁護を要する一生である。先生は疑問の人であり、未解決の人である。」

40

■曾我が清沢に会ったのは「疑謗の逆縁」によるものであった。逆縁＝清沢への反論を縁にして、結果として善知識としての清沢に出会った。

41

「自分が清沢の門弟であると言えるかどうかについて）自らも深き疑問を起さずに居れぬのであります。先生御在世の時他の門弟の人々が、師と起居を共にし、師の精神主義を讃仰しつゝあつた時、われは、嗚呼われは果して何処に何事をなしつゝある乎。嗚呼われは想へば八年の昔、巢鴨の天地に在りて、筆なる剣を以て先生並に現在の同人を害せんと企てつゝあつたのであります。嗚呼われは積尊に対する提婆達多也、親鸞聖人に対する山伏弁円であつたのであります。」

■しかし清沢が「疑問の人」「未解決の人」であつたことは、曾我自身にとっては積極的な意味をもっている。

「かくて我は徹頭徹尾疑の子である。悲しむべき極である。けれども深く考ふれば、信ずるものは信に依りて先生を忘れず、疑ふ者は疑に依りて先生を忘れぬことが出来る。疑もつまり先生を憶念する一大善巧に外ならぬのである。想へば疑は無意識の信であり、信は無意識の疑である。われが先生を疑ふはその中心に潜在せる信念あるを証するのである。感謝極りなきことであります。」

- 「疑問の人」＝問わずにはおれない人。また自分に問いかけるように働きかけてくる人。
- 私たちは、人生において時々、自分の想定を超えており問わざるをえない人、気になって仕方がない人に出くわす。「あの人はなぜあのときああしたのだろうか」。「あのときなぜああ言ったのだろうか」。
- こうした、問いかけるように働きかけられること、問いかけることにおいてその人との対話がはじまる。そのとき、私たちは「問いかけるように働きかける人」に出会っている。

8. 疑問を「解釈」するということ

- 対話を通じて、こちらの疑問や思い込みといった「固まりやしこりが徐々に溶けていく」（「解」や「釈」の意味）ことがあるだろう。
- そして曾我の場合、固まりやしこりが徐々に溶けていくことは、清沢からの影響を通じて「釈迦の弟子となる」（「釈（釋）」の意味）、仏者となるということにも通じている。

- 曾我が、清沢への疑問について、「如来は我等に心霊的鍛錬をなさしめんが為に、猶暫らく是疑問を解釈せしめ玉はずと覚ゆ」としたことは、そのような意味が含まれていたのかもしれない。

9. プラトンのソクラテスとの出会い（参考）

- ソクラテス裁判
 - 危険人物として告発される。
 - 有罪
 - ・有罪（不敬神）を免れるための駆け引き→しない
 - ・刑を軽くする駆け引き→しない
 - 死刑判決
 - ・逃亡→しない
 - ・友人たちとの対話が始まる。
 - ・自分を無罪にするための弁明 →しない
- 弟子プラトンには、なぜソクラテスが弁明をせずに毒杯をあおいたのか疑問となる。それを問いかける生活が始まる。
- （さらに参照）イエスの死→原始キリスト教団のはじまり。

10. 曾我の九十歳の記念講演

「これは、どうしてこういうような題を掲げたかと申しまするならば、これは、ずっと明治の昔に遡ることになるわけでございます。これは、一日でも忘れることのできない、わが清沢満之先生。……この清沢満之先生は、明治三十四年の十月十三日……いま、わたくしが題目として掲げたことを、お話のなかで問題〔如来があるから信じるのか、衆生の願いがあるから如来は現れたのか〕として、われわれ学生に与えられた。

わたくしは、とにかく、清沢満之という方に遇った。清沢満之という方は、わたしどもの善知識である。その清沢満之という善知識に遇って、そして、衆生の信というものと如来の本願というものと、いったいどちらが根本であるか、どちらが先であるか、そういうことを考えてみよと。」
（「我如来を信ずるが故に如来在ます也」1965年）

11. 私の出会った人 (参考)

判断に困ったとき、「あのひとであればどう判断するだろうか？」と、許可も得ていないのにかつてに登場いただく、〈脳内の常連〉とおぼしきひとたちがいる。そのひとりにはカントで、ひとりには祖母。それぞれ、脳内にとっかかりは一定の範囲内での押しも押されぬ権威者として、脳内にとっかかりは一定の範囲内での押しも知らなかつたけれど、祖母のおかげでぼくは哲学と、そしてカントに出会うことができた。

もうふたりは大学の恩師。とくに学生との関係で迷ったときに、いつもふたりを思い出して、「先生ならどうなさるだろうか？」と問いをめぐらす。記憶のなかになかまあってあるふたりの言葉に検索をかけて、類例がないかどうか、参考になるものがないかどうか探しはじめる。そうすると、ひとりはやさしいまに微笑みながら、ひとりには思いやりで満たされた暖かい心を押し殺して明晰に、語りはじめる。ぼくはふたりの言葉にじっと耳を澄ませます。



大谷大学は問い続けることを学生に求める。
それは大谷大学が出会いの場であることを意味している。*
